

### 災害に立ち向かった人々

災害に立ち向かってきた人々は地域の偉人として市町村史や郷土誌などにも記されていますが、ここでは小学校の副読本や小学生が調べて書いたものをもとに紹介します。

#### ■那賀川の万代堤を築いた吉田宅兵衛（徳島県阿南市）

天明7年（1787）に那賀川が氾濫した後、古毛村（現在の阿南市羽ノ浦町）の庄屋・吉田宅兵衛は洪水から人や田畑を守るため堤防をつくることを決意しました。下流の14の村々とも話し合い、藩から堤防工事の許しをもらい、工事を進めました。工事中には大水が出て、堤防が壊れることもありましたが、人々は協力して堤防を完成させました。堤防は「万代堤」と名付けられました。完成後も堤防は洪水により度々壊れましたが、吉田家が中心になり、村人が力を合わせて牛柵をつくったり、大岩を置くなどして、堤防を守ってきました。（羽ノ浦町教育研究所編「わたしたちの町 羽ノ浦」1997年、による）

#### ■豊田台地に水を引いた西山九郎右衛門（香川県観音寺市）

豊田台地（観音寺市新田町）には水が少なく、日照りが続くと作物が枯れることがしばしばでした。そこで、新田村の庄屋の子・西山九郎右衛門は奥谷に新しい池を築き、水を豊田まで引くことを考えました。寛文2年（1662）に工事にかかりましたが、用水路の道筋にあたる岩鍋池の縁には固い岩盤が続いていました。九郎右衛門は一晩中岩の上で芋の蔓を燃やし、焼けた所に水をかけて岩にひびを入れて、ノミやツルハシで削っていくという方法で、1年余りで用水路を完成させました。九郎右衛門は村人によって西山神社に祭られています。（観音寺のすがた編集委員会「観音寺のすがた」2003年、による）

#### ■三カ村掘貫水門を完成させた橘並右衛門（愛媛県東温市）

牛湊村、南野田村、北野田村辺り（東温市）は水不足で、日照りのために稲が枯れることが度々でした。北野田村の庄屋・橘並右衛門は、何日も重信川の川原に寝泊まりして、川の下を水が流れていることを確認すると、湧水を田に引く計画を立てました。その仕組みは、重信川の川底に溝を掘り、その上に石でふたをしてトンネル構造とし、溝に溜まった水を三カ村に引き入れるものでした。三カ村の人々にも働きかけて工事を進め、10年の年月をかけて、天保10年（1839）に三カ村掘貫水門が完成しました。この水門には一年中水が流れています。（重信町郷土読本編集委員会「わたしたちの重信町」2002年、による）

#### ■金八堤を築いた佐々木惣之丞（高知県須崎市）

新荘川の流域では、大雨が降る度に、洪水による被害を受けてきました。佐々木惣之丞（1738年～1817年）は堤防を築く決意をしました。妻・お米の活躍もあり工事費を工面し、村人の協力も得て工事を始めることができました。工事中には洪水が起こり、堤防が何度も流されることがありましたが、10数年後に合計4kmの堤防が完成しました。この堤防ができてから、新しく50町歩の田畑が開かれ、村人たちは米の収穫量を増やすことができました。堤防は、惣之丞の別名をとって「金八堤」と呼ばれました。（須崎市立多ノ郷小学校6年A組「佐々木惣之丞」須崎史談第136巻、2003年、による）

地域の先人に学ぶことは、子どもたちの地域への愛情や誇りを育む上でも大事なことだと思います。アーカイブスでは、人物辞典や土木史などによく出てくる著名人だけではなく、一般にはあまり知られていない人たちにも光を当てていきたいと考えています。